

ピンカーにおけるスティグマの特徴と構造に関する 考察：スティグマと依存性の関連性

著者	松岡 是伸
抄録	<p>本稿ではピンカーのスティグマに関する見解に着目しスティグマがどのように据えられ、位置づけられレイルのかを整理、分析することでスティグマの付与、構造、形成要因などを明確にしていくことが目的である。その結果、ピンカーはスティグマを民主主義社会において課される心理的暴力であり、制裁としてのスティグマの付与を明確にしていた。そして福祉サービスの互酬性に着目しスティグマは依存的な地位と同一であることに言及していた。そのうえで、スティグマがソーシャルポリシーの供給と受給レベルにおいて制裁として課されるには、依存性という地位が機能しなければならない構造が明らかとなった。本研究を総合的にまとめるとピンカーは、福祉サービスの供給と受給に対する感受性とスティグマとの間に深い関連性があると据えていたことが明らかになった。</p> <p>The purpose of this paper is to analyze the Robert Pinker's theory to clarify the view and position on stigma in the area of social ...</p>
雑誌名	紀要
巻	8
ページ	45-52
発行年	2014-03-31
出版者	名寄市立大学
ISSN	18817440
書誌レコードID	AA12272535
論文ID (NAID)	110009760167
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001553/



ピンカーにおけるスティグマの特徴と構造に関する考察

—スティグマと依存性の関連性—

松岡是伸*

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

【要旨】本稿ではピンカーのスティグマに関する見解に着目しスティグマがどのように捉えられ、位置づけられているのかを整理、分析することでスティグマの付与、構造、形成要因などを明確にしていくことが目的である。その結果、ピンカーはスティグマを民主主義社会において課される心理的暴力であり、制裁としてのスティグマの付与を明確にしていた。そして福祉サービスの互酬性に着目しスティグマは依存的な地位と同一であることに言及していた。

そのうえで、スティグマがソーシャルポリシーの供給と受給レベルにおいて制裁として課されるには、依存性という地位が機能しなければならない構造が明らかとなった。本研究を総合的にまとめるとピンカーは、福祉サービスの供給と受給に対する感受性とスティグマとの間に深い関連性があると捉えていたことが明らかになった。

キーワード：スティグマ、依存性、ソーシャルポリシー、ロバート・ピンカー

I. 諸言（研究の目的）

第2次世界大戦後、ソーシャルポリシー^[1]の学問的形成に大きく貢献したリチャード・ティトマス(Richard Titmuss)はスティグマの問題性を指摘し、学問的・研究的主題へと位置づけた。スティグマとは、人々に不名誉な感覚、特定の品行や振る舞いなどであり、社会学者であるアーヴィング・ゴッフマン(Erving Goffman)は「人の信頼をひどく失わせるような属性（であり）、…本当に必要なのは明らかに、属性ではなく関係性を表現する言葉」であるという(Goffman =2003:16)。しかしながらティトマスはゴッフマンらのスティグマ研究について「並はずれて狭い」と表現し、ソーシャルポリシー研究ではスティグマを幅広い文脈（社会関係）で捉えることが主流となっている(Titmuss 1974:45)。このような中で戦後のソーシャルポリシー研究の発展に貢献し、ティトマス以降に活躍をしたイギリスのソーシャルポリシー研究者であるロバート・ピンカー(Robert Pinker)のスティグマに関する見解について着目していく。

ピンカーは1979年にはLSE(London school of economics and Political Science)の副学長、1989年には副総長を務めソーシャルポリシーやソーシャルワーク教育など福祉国家の黄金期と危機以降の社会福祉学の構築に貢献した。また日本の社会福祉学界との交流も深く1983年の国際社会福祉協議会日本国委員会の招聘を機に岡田藤太郎などとの交流が深い人物である。

これまでにピンカーは、論文や著書、講演などにおいて必ずスティグマについて言及していた。しかしソーシャルポリシーやソーシャルワークが注目されることが多くスティグマに着目し議論を整理したものは非常に少ない。ピンカーのスティグマに関する議論は現実的な観点で貫かれ、学的慎重さと誠実性を感じることができるとも評価されている(岡田 1995)。そのためスティグマとソーシャルポリシーを検討、整理、源流を探るうえでは欠かせない人物である。

そこで本稿では、ピンカーがスティグマをどのように捉え、位置づけていたのかに言及しスティグマとソーシャルポリシーを分析することでスティグマの付与、構造、形成要因などを明確にしていくことが目的である。

II. 分析の枠組み

1. 対象

2013年8月7日受付 2014年2月18日受理
*責任著者
住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1
E-mail: yoshinobu@nayoro.ac.jp

ピンカーの代表的な著書として、1971年の『Social Theory and Social Policy』(Heinemann Educational)と1979年の『The Idea of Welfare』(Heinemann Educational)がある。この他にも1982年のバークレイ報告の少数派意見やソーシャルワーク、グローバリゼーションに関する論文などがあり、ソーシャルポリシーからソーシャルワークまで幅広い範疇で議論を展開していた。現在までにピンカーは、道徳的倫理的規範に傾斜する福祉モデルを批判し、社会理論と実際のサービス受給者の観点から福祉モデルないしはソーシャルポリシーの構築を試みていた。しかしながらこのようなピンカーの立場を踏まえスティグマを論じたものは少ない。

このことからピンカーのスティグマとソーシャルポリシーとの関係は十分に明らかにされてこなかった。本稿ではこの点に注目し、主に代表的な著書を中心に1970年代から1990年代までのピンカーの見解を主な対象として整理・考察していく。なお本稿ではピンカーにおいてよく取り上げられる多元主義や重商的集合主義、グローバリゼーションなどは紙幅の都合上、主題として扱っていない。この点とスティグマに関しては別稿に譲ることをお許しいただきたい。

2. 方法

本稿はピンカーの学術論文並びに著書からスティグマとソーシャルポリシーに関する議論を整理し、スティグマ自体とソーシャルポリシーとの関係性を考察していく。そのため史資料で確認できる事実に依拠する歴史学的手法を採用した。また研究の再現性を確保する観点から一般的に公になっている史資料を用いており、私信や一般的に入手不可能なものは採用していない。またピンカーの史資料を中心に叙述しているが、他の研究者の論文並びに著書において照合し叙述の妥当性に努めた。たとえば、ピンカーの福祉モデルの理解が、ピンカー自身の内容と、日本で紹介された内容では若干相違する場合などが見られた。このような場合、本質的に一次資料であるピンカーの記述を採用し、相違点を本論若しくは脚注にて示し、事実的把握を明示するように努めた。なお本稿は原典主義を貫き、訳本から引用する場合は原典を確認後、訳本の出典箇所を明示した。

III. ピンカーのスティグマに関する見解

1. スティグマとその対象となる人々

スティグマをどのように捉え、その対象はどのような人々かについて言及していきたい。ピンカーは、スティグマを課すことは民主主義社会において用いられる暴力の形態であり、身体的脅迫や攻撃を伴わなければ、高度に洗練された心理的攻撃、暴力であると表現した(Pinker 1971:175)。そのようなスティグマを解決するためには、スティグマの経験自体やそれが直面しそうなサービス供給や利用要件に対する深い理解と、受給者の立場から客観的事実に基づいた福祉モデルを構築することが必要であるという(Pinker 1971:136)。そのためピンカーは福祉サービスを受ける人々が社会の中でどのような立場にあるかを大きく2つに整理している。ひとつは産業社会において人々は、複数の文脈で調和をとって生活を営んでいるという点である。人々は社会市場と同時に、経済市場の規範においても生活を営んでいるのである。この点についてピンカーは、それ以前の福祉モデルは道徳的エートスに影響され、あまり関心がむけられていなかったことを示した(Pinker 1971:98)。

もうひとつは、人々の地位と福祉サービスの間には互酬性の規範が存在しており、サービス受給レベルにおいて影響を与えているという点である。人々は社会保険制度に対して権利やシティズンシップを有している。しかしながら被保険者の地位は、経済市場における賃労働者の地位に由来している。これによって社会保険制度の原則は「社会市場よりも経済市場の倫理に基づいている」と指摘している(Pinker =1985:98)。このことからサービス供給と受給上の地位の決定は、互酬性の規範に基づいているのである。

このような中で福祉サービスの対象となる人々は、社会の中で偶然にサービスを利用する人々であり、それが問題として言及されるのである。そして「…社会サービスが最も影響を与えるのは、まさにその性格からして、その社会化が完全なところではなく、市民の地位の把握が最も乏しい人々…」なのである(Pinker =1985:144)。

2. スティグマの付与過程としての制裁

ピンカーは、福祉サービス自体が抱える問題として利用者には、制裁を与える担い手と映るというこ

とをあげている(Pinker 1971:139;Pinker 1979:52-3)。そこでスティグマの付与過程に関する議論は、福祉サービス自体が抱える2つの側面と、それらを取り巻く3つの要因に整理することができる。まず、この福祉サービス自体が抱える側面のひとつは、個人の自由と独立を高揚し財・サービスを満たすことである。もうひとつは、個人にスティグマを制裁として課すことである(Pinker 1971:139)。では、なぜ福祉サービスを利用する人々には「制裁を与える担い手」として映るのであるのか。それは福祉サービスが経済市場においてスティグマ化された人々の回復の装置として利用されるからである。しかしながらこの目的は、多元的な産業社会全体で共有されることはない。同時に多元的な社会では、それぞれの状況と基準によって自己を価値づけ、産業社会では経済目標が福祉目標に制限を課している(Pinker 1971:138)。この結果、福祉サービスは経済目標に合致しなければならず治療や矯正を福祉サービス内に装置として構築するのである。この装置は歴史的に選別主義的サービスとして劣等処遇原則やソーシャルワークの治療的機能において見られた。福祉サービスを受給する人々は、必然的にこの装置に出会い経済市場での失敗とそのような地位の感知を経験するのである。それが「制裁を課す担い手」と映る所以である。

次にスティグマの付与過程を取り巻く3つ要因を整理していく。第1に、社会(大衆)の制度に対する理解の忘却である。社会は福祉サービスを合法化と制度的秩序化をする。同時に制度の社会化の過程で個人に対して相互扶助と自助の規範を伝達する。これらの過程において制度は体系的・普遍的であり、社会の中で個人はその意味を認識し持続していく。しかしながら社会化された個人であっても制度の理念や意味を忘却しやすく、またその伝達過程で単純化される傾向がある。福祉サービスは常にこの問題を抱えているのである(Pinker 1971:141)。

第2に、先述した人々の地位と福祉サービスの間には互酬性があるということである。ピンカーは、人々の権利と責任を行使する範囲は、個々人の能力によりシティズンシップの信憑性によって決定されるという。シティズンシップの信憑性は経験と社会化によってもたらされ階級的構造の客観的事実と関連している。そのため福祉サービスを受給するような地位と見做される認識を払拭できないのである(Pinker 1971:141)。

第3に、人々は個人的(主観的)事実を信頼しているという点である。福祉サービスは基本的に人々のシティズンシップの地位、能力、階級的格差などの客観的事実によって決定される。しかしながら公的に規定された目標やサービスの伝統よりも自らの個人的(主観的)事実や経験を信頼し、制度の目的や目標を超えて個人的事実や経験を持ち込むのである(Pinker 1971:141)。例えばサービス申請者の身の上話は良い例であるのである。

このことから福祉サービスにおける権利性やシティズンシップは、実際には主観的な評価によってなされている。ピンカーは人々が福祉サービスを利用するとき、権利性やシティズンシップの高揚や低下が見られるが、それは地位の感知であり、サービスやニーズのカテゴリーにおいて変化するという。そのため普遍的福祉サービスが常に地位を付与することや選別的福祉サービスが常にスティグマを付与するという議論はもはや意味をなさないのである(Pinker 1971:141)。

次では、ピンカーがスティグマの観点からソーシャルポリシーの供給と受給レベルの現実的な把握をどのように行ったかに言及していきたい。

3. ソーシャルポリシーの供給と受給の関係の3つの変数(深度・時間・距離)

理論的な福祉モデルの主な例としてウィレンスキーとルポー(1958)、ティトマス(1974)などがある。これらについてピンカーは、規範(道徳)的価値を前提とレイデオロジー的に傾斜していると指摘している。そしてこの場合の多くの社会的認識には、社会科学や哲学に携わる人々の認識が強く入り込み、制度を受給する人々の認識や意識は反映されづらい(Pinker 1971:166)。そこでピンカーは、本質的に福祉モデルは、福祉サービス受給者の供給に対する心理的な態度から形成され、より現実的で受給者の観点から把握するモデルの定式化を試みた(Pinker 1971:166)。

そのモデルはソーシャルポリシーの供給レベルと受給レベルを明確に区分することである。そして双方の関係性を把握するために3つの変数(深度、時間、距離)を設定した。このモデルによって「スティグマを与える傾向という観点から、福祉システムを分類するために利用できる」とした(Pinker =1985:171)。その主要な仮説の前提は、「与えることよりも受ける方が常に威信が低くなる」であり、

主に3つの点を明らかにしている。第1に、「市民のかなりの部分が福祉の「与え手」と「受け手」の役割を厳しく区分すること。第2に、「公的福祉セクターにおける交換関係は、私的セクターに属する交換関係よりもスティグマを与える」こと。第3に「交換関係が産業社会における依存状態を定義しそれに関連する共通の文化的及び生物学的要素を伴うかぎり、そのような交換関係はすべて本来的にスティグマを与える」というものである(Pinker =1985:171-5)。そしてソーシャルポリシーの供給と受給レベル、特にその双方の関係の把握のため3つの変数が双方に質的に大きく影響するとしたのである。では、その3つの変数である深度(depth)、時間(time)、距離(distance)を見ていこう。第1の「深度」は、サービス受給者の地位を合法的に受け入れ、受給者が依存性と劣等感を自覚することである。ここでピンカーは教育や回復が見込まれる疾病・障害などは相対的にスティグマが少なく、回復が見込めない集団ほどスティグマが増幅される例をあげている。この「深度」が本質的に屈辱的なのは、受給者や依存者という地位にあり、その度合いを示しているのである(Pinker 1971:170-3)。

第2の「距離」は、産業社会における人々の社会的空間的距離をあらわしている。サービス受給者が供給者より距離がひらけば受給者は少なく受け取る傾向がある。歴史的にも救貧法下の被救済窮民は社会的距離が拡げられていた。施設における収容も空間的距離を人々から拡げることによって効果的であった。そのため地域におけるサービスの創出は、スティグマを減少させる効果がある。しかしながら英国救貧法は終始地域的なサービス供給であったがスティグマを与えていた。それは救貧法のサービス自体がスティグマを与えるものであったためである(Pinker 1971:173-4)。

第3の「時間」は、依存状態の期間である。依存状態(受給期間)が長期化すれば、スティグマは深くなる。身体障害や精神障害のスティグマは、二次的社会化、再社会化に時間を要するほどに劣等感やスティグマ感は強化され、その例として施設収容におけるホスピタリズムの影響、人種や宗教問題などをあげられていた。その中で被救済窮民化の過程に注目し、要救済窮民の人々が貧困に適応し、その状態に無関心になったときスティグマは確定する。その過程において受給者に依存的な地位を受け入れさせたということになる。依存状態の長期化は、依

存状態という地位への順応と見ることもできる。そして極端な依存状態は、スティグマと同等なものとして社会化された状況で経験するであろう(Pinker 1971:174)。

これらのことからピンカーは主に3つ指摘を示した(Pinker 1971:174-5)。第1は、供給レベルにおいて公的福祉サービスはスティグマを与えやすい傾向にあるという点である。スティグマは希少な資源を配分する管理及び技術となり、強制は配給の手段ともなり、スティグマ化が「最も効果的な形態」となる。第2に、受給レベルにおいて最も強いスティグマは依存状態で自己の尊厳を保持する経験をするときである。第3に、受給者自体において、極端な依存状態はスティグマと同等であるという点である。このような状況では受給側の人々のシティズンシップは真正な意味で獲得しておらず意味をなさないのである。このようなことからピンカーはスティグマを福祉サービスにおける構造や目的、地位などを理解し把握していくための中心的現象と捉え、位置づけていた(Pinker 1971:175)。

さてこのモデル自体はスティグマを捉えるために設定されたものではない^[2]。ソーシャルポリシーにおける供給と受給レベルの現実的な把握のために設定されたものである。その中でスティグマは中心的課題と位置づけられ依存性との関連性が多く見られた。そのため次ではスティグマと依存性について言及していこう。

4. スティグマと依存性

1) 依存性の性質

先述してきたことからソーシャルポリシーの供給と受給レベルにおいてサービス受給者の最も深いスティグマは、依存という地位にあるときである。ピンカーは依存性の性質について「社会サービスの配分を支配する原則よりも、利用者の彼自身の地位に関する考えに著しく影響を及ぼし、またこの影響は、障害があつて利用者が労働者および供給者として独立した地位を回復するのを妨げる時に、最大とあるであろう」という(Pinker =1985:209)。そのため産業社会における社会規範や自助規範(多くは自立・独立、勤勉、節約などを志向する社会)において、極端な依存性は「文化的には、従属しスティグマを負わされた地位と同一」という地位になる(Pinker 1971:209=1985:210)。

では、依存性が見られない場合を想定してみよう。この点は大きく2つに整理できる。ひとつは、福祉サービスを受給する人々の社会的評価が産業社会における自助規範や社会規範と合致している場合、依存性は自立的な地位の回復と「成功」に変換され依存性が見られない点である(Pinker 1971:210)。

もうひとつは産業社会における家族の役割への着目である。核家族化の進展を前提としながらピンカーは、依存性が最も見られないのは、互酬性・互惠性の規範の等価性がとれているときであるという(Pinker 1971:160)。この点からピンカーは依存性を避けられる傾向として、主に家族が「多くの供給者から部分的な性格の扶助を受けている時、スティグマを伴うあるいは屈辱的性質の依存状態が最も避けられる傾向」があるという(Pinker =1985:165)。さらに修正拡大家族を議論し、「…贈与者間に競争の要素がある時、受給者は最も成功する傾向がある」としている(Pinker =1985:165)。対照的に「解体」家族や核家族の構成員において母子家庭などを例示し、原因に関わらず「…福祉機関に依存するとき、すぐに大きなスティグマを負わされた第1次集団となる」という(Pinker =1985:165)。さらに例えば本来、寡婦の地位は尊敬に値する地位であるが、「公的扶助に依存するようになった時、この地位が屈辱とスティグマから…保護することはない」という(Pinker =1985:165)。このことからピンカーは、核家族が危機に晒されたとき、仮に家族からの補足的支援がなければ、福祉機関への全面的な依存というリスクにさらされるというのである(Pinker 1971:161)。

以上のことから依存性は、自立・独立の回復・成功と結びつかないかぎり、回避されることはないであろう。しかしながら家族の役割に着目することによって依存性は、家族・親族間の補足的な支援・支持によって回避することも可能である。そしてここでは部分的な補足的支援・支持と、家族・親族における供給に競争原理が働くときに依存性は避けられやすいというものであった。

2) スティグマと依存性

福祉サービスを受給する人々に課されるスティグマは、依存性におけるその人々の地位が関連している。したがって依存的な地位にある人々は、スティグマが課されるということになる。その地位の決定には大きく2つのことがいえる。第1に、依存的地位は、福祉サービスを納税者の「重荷」として見る社会の動向と、その対象となる福祉サービスとニ

ーズに応じているということである(Pinker 1971:201)。例えば公的年金と公的扶助では、社会一般的に公的扶助の方が納税者の重荷と見做されやすい。また一時的な骨折とその治療は、依存状態と見做されるよりも自立・独立への回復過程と捉えられ、依存的地位とは見做されづらい。

第2に、地位は経済的地位のみではなく社会的文化的要因の影響を受ける点である。そしてピンカーは、貧困者は経済市場において同格(等価性)を要求できるだけ金銭を欠いているといい、この等価性が崩れたところにスティグマを課すことによって現実の福祉サービスを受ける人々はスティグマ化されていくのである。この場合は、スティグマ化は経済的な文脈と共に、文化的社会的な文脈上においても課されているのである。そのため産業社会がスティグマや依存性を社会に吸収できないことを示している(Pinker 1971:210)。よって地位は経済のみならず文化的社会的な影響を受けていることが理解できる。

このように地位はスティグマと依存性に関連している。これらを踏まえソーシャルポリシーとの関連でスティグマと依存性について見ていこう。まず公共サービス(公共事業)にはスティグマや依存性があり見られない。例えば公共の路線バスを利用する人々にスティグマを課すことは、現代社会においてはほぼ見られない(Pinker 1971:150-151)。どうやらこの点からソーシャルポリシーの供給と受給レベルの間にある感受性の高低がスティグマや依存性を表面化させるひとつの機能となっている。福祉サービスは極めて感受性が高まりやすいと考えることができる。この感受性の高さが等価性や互惠規範が崩れに対してスティグマや依存性を課すのである。ピンカーは福祉サービスにおいて感受性を高める要因を大きく2つに整理している。ひとつは、福祉サービスにおける利用者の個別化である。これは申請者のニーズを的確に確認するためであるが、供給と受給レベルの感受性を高める危険性を犯しており、受給レベルに依存状態であることを強く気付かせる効果がある(Pinker 1971:151)。

もうひとつは、サービスの供給と受給の関係が本質的に不安定で不平等でありながら、双方の葛藤と不一致を伴いながらも等価性の問題を抱えていることである(Pinker 1971:153)。これは交換システム上の等価性を維持できないことと、維持させようとすることからくる葛藤と不一致の問題である。さら

に福祉システムは経済市場の範囲外にあるため「…人間意識の性格そのものが…恒久的に依存性のスティグマと義務にさらす」といい、経済市場における金銭の欠如は依存性のスティグマという効果を持つことになる(Pinker=1985:159-60)。

これらのことからサービスの供給と受給における関係の感受性の高まりは「交換という経験において、人間の恒常的中心的な経験は威信あるいはスティグマの感情を伴って、与え手の側の寛大さないし尊大さ、ならびに受け手の側の感謝あるいは憤慨のような、一連の態度が現れる」というのである(Pinker=1985:159-60)。

IV. ピンカーの観点からのスティグマの特徴と構造

ここでは、これまでの議論を整理・考察することでスティグマの捉え方、位置、付与過程、構造と特徴、形成要因などを明確にしていきたい。

1. スティグマの特徴(意味, 対象, 付与過程)

まずスティグマの意味、対象、付与過程であるが、ピンカーはスティグマを社会において課される暴力であり、現代では心理的な攻撃であると捉えていた。そしてそれらは経済的社会的な複数の文脈上において生活を営む人々が、ソーシャルポリシーをたまたま受給する人々と見做されるときにスティグマは課されていた。制裁としてのスティグマの付与過程では、先述してきたように福祉サービス自体が抱える2つの側面とそれを取り巻く3つの要因がスティグマ付与の構造として把握することができる。

そしてこの構造の背景として経済市場に目的・目標に制限される福祉目標との関係性があり、その影響を受けスティグマをさらに創出させやすい構造となっていた。よってスティグマの議論は普遍主義や選別主義的サービス対象の観点を超えたところに焦点がある。

2. スティグマと依存性の連関性(スティグマの構造)

ソーシャルポリシーの供給と受給レベルの感受性が高く、サービス受給者が最も深いスティグマにあるとき、その受給者は依存という地位にある。依存性とスティグマは極端な場合、同一視できる。スティグマが機能するためには前提として、交換システム上の互酬的規範が崩れていることと同時に、

「与える側」と「与えられる側」の感受性が高感度になっているときである。それによって「与えられる側」が等価性を維持できないとき、スティグマが課される。それを課するためには、依存性という地位が機能しなければならない。依存性は互酬的規範が崩れたとき、いわゆる等価性を保持できないときに発生する。

ようするにスティグマが課されるということは少なからず、依存性が機能するということである。このスティグマが課される範囲や程度などは、ピンカーが示した深度、時間、距離の3つの変数により把握が可能であり、それによって確定していくのである。

これらのことからスティグマを回避するいくつかの方法が見えてくる。まず第1に、互酬性の規範の崩れや「与える側」と「与えられる側」の感受性を高めないことである。これらに対する対策は、社会サービスの権利性や人々のシティズンシップの確立により試みられてきた。しかしながらこれらは人々が経済的・社会的な複数の文脈を生活している点や主観的事実に信頼を置いている観点から完全な回避策とはなっていない。

第2に、依存性の変換である。依存性は、自立・独立の回復の見込みない場合や家族における補足的支援の範囲においてスティグマが回避される傾向が見られた。そこでは依存性を一定期間の回復期と捉えることや、生活を包括的に単一の機関から支援をされるのではなく、部分的に複数の機関(又は家族ら)から支援を受けることによって依存性を回避していた。そのため「与える側」の多元化と競争、「与えられる側」の部分的支援などにより、供給と受給を良いデザインとすることで依存性とスティグマを回避できる可能性がある。これはピンカーの福祉サービス供給の多元主義化につながる点でもある。

この他にもいくつか考えられるが、本稿の文脈上においてはこの2点であろう。そしてこの2点はすでに現代ソーシャルポリシーにおいて取り組まれており、一定程度の評価を見ることも可能である。しかしながらこれらはスティグマや依存性の観点からの実施、評価されたものは少なく、ソーシャルポリシー研究においてスティグマと依存性に対する視点は脆弱であるということが指摘できるのである。

V. 結論

本稿では、ピンカーのスティグマに関する議論に着目し、スティグマの特徴と構造を明らかにしてきた。そこで得られた新たな知見としては、ソーシャルポリシーの供給と受給レベルの双方の感受性の高さなどがスティグマを課す前提となっており、依存的地位とスティグマには関連性が見られたことである。このような知見はこれまでのスティグマやソーシャルポリシーにおける研究においてはあまり見られない。この点はスティグマを回避するソーシャルポリシーを形成するために重要な観点となり得るものである。同時に受給レベルにおける依存性の把握が今後のスティグマに関する研究において極めて重要であることを示すことができた。

今後の課題としては、本稿ではふれることのできなかったピンカーのソーシャルポリシー論における多元主義論を検討することによって、スティグマと依存性についてより深く言及することである。同時に現代ソーシャルポリシーにおいて「スティグマの観点」から供給と受給レベルにおける把握を試みていくことが課題となる。

脚注

[1] 本来であれば「ソーシャルポリシー・アドミニストレーション(Social Policy and administration)」と示さなければならないが、紙幅の都合上、ソーシャルポリシーとしている。また翻訳当時、「社会福祉学」と意識されており、その背景については監訳者である岡田藤太郎の「解説」で詳細に論じられているため参照のこと。Pinker, R. (1971) *Social Theory and Social Policy*. Heinemann Educational. (= 岡田藤太郎, 柏野健三訳 (1985) 社会福祉学原論, 214-215, 黎明書房, 名古屋.)

[2] 小田謙三はイギリスにおける社会福祉のスティグマ問題をまとめた論文の中で、ピンカーの福祉モデルについてスティグマを捉え把握する「三つの変数の立体構造」と位置づけた。しかしながらピンカーの議論を見る限りスティグマを中心的な課題としつつ依存性や地位, 劣等性などの把握もされていた。そのためピンカーの福祉モデルは、必ずしもスティグマを捉えるモデルであるというのとは的確ではないことを示しておく。小田謙三 (1993) 現代イギリス社会福祉研究, 132-134, 川島書店, 東京。

文献

- George V, Page RM (ed) (1984) *Modern thinkers on welfare*. Prentice Hall, London.
- Wilensky HL, Lebeaux CN (1958) *Industrial and social welfare*, Russel Sage Foundation, London. (=四方寿雄監訳(1971) 産業社会と社会福祉(上・下). 岩崎学術出版社, 東京.)
- 岡田藤太郎 (1995) 社会福祉学の一般理論の系譜, 相川書房, 東京.
- Goffman E (1963) *Stigma notes on the management of spoiled identity*. Simon & Schuster, Inc, New York. (=石黒毅訳 (1963) スティグマの社会学, せりか書房, 東京.)
- Titmuss R (Abel-Smith B, Titmuss K eds.) (1974) *Social policy: An introduction*, George Allen & Unwin, London. (=三友雅夫監訳 (1981) 社会福祉政策, 恒正社厚生閣, 東京.)
- Pinker R (1971) *Social theory and social policy*, Heinemann Educational, London. (=岡田藤太郎, 柏野健三訳(1985) 社会福祉学原論, 黎明書房, 名古屋.)
- Pinker R (1979) *The idea of welfare*, Heinemann Educational, London. (=星野政明, 牛津信忠訳 (2003) 社会福祉三つのモデル——福祉原理論の探究, 黎明書房, 名古屋.)
- Pinker R (1992) *Making sense of mixed economy of welfare*, *Social Policy and Administration* 26(4), John Wiley & Sons Ltd.
- Pinker R (1995) *Golden age and welfare alchemists*, *Social Policy and Administration* 29(2), John Wiley & Sons Ltd.
- ピンカー (岡田藤太郎監訳) (1986) 90年代の英国社会福祉—ロバート・ピンカー講演集—, 全国社会福祉協議会, 東京.
- ピンカー (岡田藤太郎訳) (1999) 英国における福祉政策の動向—「市民資格」概念の変化—, *ソーシャルワーク研究* 25 (2), 相川書房.

Original paper

The Structures and Characteristics of Stigma: The Robert Pinker

—Relationship Between Stigma and Dependence—

Yoshinobu MATSUOKA*

Department of Social Welfare, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

Abstract: The purpose of this paper is to analyze the Robert Pinker's theory to clarify the view and position on stigma in the area of social policy. The result is that Robert Pinker defined stigma as a psychological violence and a kind of sanction given by democratic society. Furthermore, Pinker described dependence as being equivalent to the stigma of receiving welfare services without being able to reciprocate in kind. It was clear in his view that the structure of the stigma cannot be built without dependence in the supply and demand of social policy.

Through analysis of Pinker's view, the sensitivity between the supply and demand would be the premise to impose stigma. It means that there is a strong structural relationship between stigma and dependence.

Key words: stigma, dependence, social policy, Robert Pinker

Received August 7, 2013 ; Accepted February 18, 2014

*Corresponding author (E-mail : yoshinobu@nayoro.ac.jp)